

フネによる

「バカリジヤン」（『セグ叙事詩』）をめぐつて

出 水 慈 子

一 「バカリジヤン」とその背景

1 「バカリジヤン」挿話三編

『セグ叙事詩』はマンデ系言語バマナンを話す農耕民バンバラによるセグ王国（王都は現マリ共和国セグ）の、王朝を中心テーマとする叙事詩である。一七四〇—一八〇〇年ころ最盛期を迎えた王国は、ニジェール川中流域に位置し、その領土はギニアのブーレ、オートボルタのワイグーヤ、象牙海岸のオジエンネ、テングレラに及んだ。伝統的制度を農民皆兵の軍隊に活用し、武勲を尊ぶ軍事国家で、イスラム教とアニミズムのシンクレティズムが強かつた。『セグ叙事詩』はすでに数ヶ国語で翻訳されているが、ほとんどがジェリ（語り部・楽師）の語りである。本稿はイスラム教を主軸にするとされるフネ（語り部）モディボ・カマラの「バカリジヤン」^(注1)を対象とし、その語り口の特徴を浮き彫りにするためにジェリによる代表的『セグ叙事詩』二編を参考に、主要な構成要素を比較検討する。

モディボ・カマラ（Modibo Kamara以下モディボ）による語りは「英雄バカリジヤンを中心にして」という求めに応じた物語で、叙事詩サイクルの一部ではあるが、英雄に纏わる挿話のみを一編にまとめて語り終えている。ジェリのタイルー・バンベラ（Tayru Banbera以下タイルー）によるコンラッドの『陰謀策術の国』は典型的王朝叙事詩で、セグ王朝誕生から、本稿に登場するダ・モンゾン王即位までに歴代の諸王、初代ビトン・クリバリ（1712年即位）ンゴロ・ジャラ、モンゾン・ジャラなどが語られ、バカリジヤンと父親シニカジヤンはダ・モンゾン王即位（1808）直前に伏線のように言及されるが、バカリジヤンとビリシのモチーフは、全体の四分の三が経過後本格的になり、叙事詩はバカリジヤンを中心に展開し終了する。ジェリ、シソ

コ・カビネ（Sisoko Kabine以下シソコ）は全十二編からなる『セグのバンバラ叙事詩』のうち六篇を語る。^{註3} コンラッドがモチーフと呼ぶテーマを持つエピソードでいえば、Tome I は諸王関連のみで五編、Tome II には全七編、そのうちバカリジヤン関連は三編で、これらをシソコ・カビネが語る。

2 「バカリジヤン」のあらすじ

大筋において三編は共通するが、ここではモディボのあらすじをまとめる。（重要なモチーフで他の二編にはない場合、また重複しないなどは必要に応じ付記する）

ダ王に「sinikajan（殺されるのを）明日まで待てない」と言いい放つた為、シニカジヤンと呼ばれる牛飼いとその妻には子宝がなく、マラブの「子は授かるが、赤貧に陥る」という予言通りに、ジョフオロンゴ村は急襲され、困窮した父親は村を出す。

父なし児バカリジヤンの不遇な幼年時代、他方、ダ王もマラブの占いにならないフラン女性の嫁取りを敢行、次々に王子を得る。またダ王は、マラブの予言「勇者が西から到来」に従い勇士捜しを行い、バカリジヤンを呼び寄せる。彼は嫉妬した王子たちのいじめに会い、たまりかねて一人を殺害、村に逃げ帰る。当時、ならず者ビリシがセグに巣くい住民を恐怖に陥れていた。彼はその年の勇者に配分される肉を毎年要求し、留守中でも肉は配分されていた。成人したバカリジヤンはビリシ退治を決意、手始めにビリシ用の肉を横取りし、一族で平らげてしまう。ビ

リシの報復を恐れるダ王はビリシが滯在するマシナ王国に「セグは無関係」を表明し王宮に閉じこもる。バカリジヤンはマラブにビリシとの対決吉兆を占つてもらい、戦略の秘策を授かる。対決の日、王国は城門を開ざし、二人は城外で騎馬戦を展開した。バカリジヤンは落馬したビリシの首を討ち取り、半身不随となる（ジェリでは盲目）が、やつと城門が開かれ凱旋する。手厚い看護で障害の癒えた英雄は息子と故郷に帰る。後日、バカリジヤンの自慢話を仄聞して立腹したダ王の陰謀に嵌められるが、息子の援護で窮地から脱出する。その後、フランの牛泥棒追跡をまかされ、無事に牛を連れ戻すなどの活躍は言うに及ばず、多数の戦闘に参加し勇猛果敢な戦士の生涯を終わる。縁者の子孫がジョフオロンゴ村に現存している。

3 軍事国家セグ王国と主要人物

主要人物中、歴史的に最も重要なダ・モンゾン（1808-27在位）はトンジョン（ドレイ家臣）出身ンゴロ・ジャラ創立^{註4} ラ王朝四代目の王である。バンバラの地では最も有名なファマ（Faama 君主）であり、伝承や年代記はバンバラ帝国最高の君主と認めている。在位中、近隣諸国の制圧を怠らず、ブーレ金鉱の直轄領化、マリ帝国の帝王の子孫にしてカンガバの王族ケイタや、マンディン北部の首都サンバニヤナンの王バシなどを従属させ、年貢を納めさせた。トンブクツ攻略、ディアンクルナとサマニアナ、コレの征服、対マシナ勝利などが知られてい

る。これらを支えたのは、農民皆兵の強固な軍隊だった。十八世紀末、この地を訪れたマンゴ・パークや、三〇年後ギニアからモロッコへ旅したルネ・カイエ^{〔註6〕}は「どこに行つてもセグの軍事力や権力の強大さを見せ付けられた」と記している。

セグは奴隸獲得をこととする戦争国家だった。したがつて武勳に代表される「チエファリン（cétarin=熱い男、荒武者）」が称揚され、それが叙事詩の通低音調となつてゐるが、同時に「バンバラ（=異教徒）」と呼ばれるほどイスラム勢力に対しても頑強な側面も持つてゐた。当時スーダン全域にイスラム教が浸透し、アニミズムは逆境に立たされてゐたが、セグ王国ではこの傾向に反する事情があつた。それは王国基盤がイスラムとは別個の伝統的年齢組織（ラントン、flanton）や位階制、各種伝統宗教的組織等の上に成立してゐることである。王国は軍事国家として勢力拡大をしたために、軍事力の母体をイスラムによる組織に変えることはできなかつた。王朝創立者ビトンの息子たちはイスラム化を強力に推進しようとしたが長男ジコロも次男アリもトンジョンに暗殺された。理由はイスラム教の強制に反発したと一般的には説明されているが、その根底にはファマの座の世襲にたいするトンジョンたちの反発があつたと考えられている。いずれにしても三代目死後、混乱状態に陥つた国家を再びトンジョンのシゴロ・ジャラ^{〔註7〕}が「ファンガ（fanga=暴力、権力）によりファマの座に上り詰めた」。ジャラ王朝を創始した彼はバンバラ独自の宗教基盤である呪術にその権力支援を求

め、イスラム教徒から押し付けられるコンプレックスを一蹴した。王と宫廷が公式行事としてニジェール河の中州で執り行なう呪術の儀式は年間合計四〇を超えて、現代に至るまで残存したコモ結社をはじめ、多くの結社が組織されていた。セグの魔術の巣窟を恐怖しないものはいないほど、その魔術は武器同様の威力をもつものとして知られていたといふ。^{〔註10〕} 戦争国家で称揚された武勳や美德とシンクレテイズムは密接に結びついてセグ王国の堅固な基盤を築いていたといえよう。

王以外の二人を客観的に論ずる文献はないが、からうじてビルシに関する、コンラッドはマシナのフラン説（モンティユ年代記）、本名ビルシ・シディビ、セグ生まれの無頼漢説（ハンパテ・バ）を紹介している。^{〔註11〕} タイルー自身はビルシ=Jokaramaジョカラメを主張。^{〔註12〕} 悪霊でも悪魔でもヲキロ^{〔註13〕}でもない人間説をとる。ビルシの名前は最初アミドウだつたが、頭でつかちの赤ん坊は「悪魔つ子 billisidenw」と呼ばれるので、悪魔、鬼と訳す説もある。^{〔註14〕} バカリジヤンについては、フランの貧しい牛飼いの息子から高位の武将になつたとする説以外に詳しいことはわからない。物語でビルシは、セグ王国と拮抗していたフランによるマシナ王国とバンバラのセグ両国を股にかけていたのに反し、バカリジヤンがマシナのために戦う事はない。

二 フネについて^{〔註15〕}

1 起源

マンデ語系社会に歴史的に存在していた社会階層はホロン（自由民）ジヨン（奴隸）ニヤマカラ（特殊職能民）の三つに分かれ、ニヤマカラはさらにジエリ、ヌム、ガランケ、フネ（インフオーマントによりソモノも）に分かれていた。ジエリとフネはグリオとして知られるが、前者は語り部・樂師で、フネは語りのみを職掌とする点^(註17)は異なるが、同族内結婚をし、同一の権利義務と責任を持つ、ことばを扱う、イスラム教徒である等々では変わらない。フネが呼称を持つ社会的階層を成す理由は、主にその起源と職掌に由来すると考えられる。グリオの出現時期に関して断定する文献はないが、タマリは、ジエリの存在は十三世紀末のマリ帝国王宮で旅行者に確認されていることとその他の資料も考え合わせると、マンデ語圏における出現時期^(註18)はそれより以前のいつか、十三世紀と推定している。一方、フネに関する証言はモンゴ・パークの旅行記にある。彼は二種類のグリオの存在にふれ、ジエリは歴史的物語を語り、戦場に赴いてまで戦士を激励する、もう一方はムハンマド礼賛を歌い、宗教儀式を行うと記録している。^(註19)名称を持つ社会階層として出現する時期についてはジエリが存在した十三世紀末以前ではないと考えられるが、その理由を同じくタマリは、フネがイスラム教の聖歌や宗教儀式を専門とする職掌を持つからには（イ）イスラム教浸透が人口の多数に及ばないかぎり成立しにくい。

それは十三世紀末以前には考えにくい。（ロ）フネの大半の生業は疑う余地のない正統的職掌であり、それらはイスラム圏のどこにもあり、それらは歴史的にも今日でも変わらない。しかしながら、フネと同様の社会的階層はイスラムの教えのなかにも、中近東、北アフリカにも存在せず、位階を正当化しうる説明はできない。スードンの宗教歌について言及している多くのアラブ資料にもフネは記録されていない。したがつてフネは十分に発達したカースト制度の中から、それに倣いながら形成されたのであろうと説明している。この説になれば、形成時期の特定はできないにしても、フネの出現はマリ帝国衰退期、十五世紀から十六世紀ということになろう。フネはイスラム教浸透とともにジエリより少なくとも一五〇年以上遅れて誕生し、マリ帝国崩壊後も人口としては非常に少ないが、マンデ語圏（マリ、セネガル、シエラレオネ、ギニア、象牙海岸北部、ガンビア、伝統的にはアニミストであるバンバラにも）に分布し現在にいたたたのであろう。

グリオ起源譚でいえば、イスラム系、非イスラム系と分類される二系統とそのヴァリアントが各地に伝わるが、どれもグリオ起源であり、ジエリ起源とフネ起源が区別されているわけではない。なかに彼らの先祖として、ジエリにスラカタ、フネにはフオサナ^(註20)が特定されている起源譚が注目を引く程度である。両者は兄弟だったというジエリの長老もいるし、フオサナもスラカタも預言者の贊美を詠唱するものだつたとも、スラカタは

歌唱、預言者贊歌、系譜語り、フォサナはハディスの専門家だったとも伝えられている。

2

ステータスと社会的慣習

同じニヤマカロでイスラム教徒ではあっても、両者に対する社会的慣習には（地域差はもちろんだが）一般的に多少の相違が残存しているようだ。たとえば、ニヤマカロは同族内結婚をするが、マリのバンバラの習慣は、ヌム（鍛冶師）とジェリ、靴職人とジェリは結婚を認め、靴職人と鍛冶師は不可とする。しかしクレ（木工職人）とフネは厳格にカースト内の他のニヤマラと交わらないといふ。^{註23}また、セグ王国時代、^{註24}伝承により有名なジェリのダンテは多くの奴隸を擁していたことや、^{註25}ガンビアのフネがジェリのグリオとなることなどが知られているが、^{註26}その逆は知られていない。金品授与をめぐる厳格な秩序についてもそれが言える。マンデ語系社会のこの慣習も地域により変化するが、一般的にはヌムはジェリ、フネ、ガランケ（皮革職人）などニヤマカロと、すでに消滅しているがジョン（奴隸）すべてに与えなければならない。逆にジョンはあらゆる人に物乞いができるが、この権利は彼らが社会的に一番低い階層である事実から、ジェリに物乞い可能なフネはジェリと兄弟視されると同時にジェリより低いと、一般的にもジェリにも見られる傾向があるようだ。たとえば「フネはジェリと呼ばれ一緒にされても不快感を示さないが、その逆は通らない」などが典型的

ジェリの証言である。またフネの存在は掴みにくく、分かり難かった原因として、ジェリに比して少数であることと、フネの就業の多様性が関係しているが、文献に散見する限り、一般に社会的に低いとされる職種が多く報告されている。フネ誕生当初はイスラム聖歌朗誦者でイスラム関連の儀式や特別な宗教歌などを專業としつつも、特にアニミズムが強くイスラム化浸透の浅い地域では、格を落とさず残存することは困難だつただろう。たとえば道化なども、一般に高い位置から低い位置に降りるほうが容易で、よくある例のひとつと考えられる。こうした事情が低く見られる傾向の温床をなしていたといえるだろう。しかしそういう通念とはうらはらに、フネのイスラム関連の学識、アラブ語の知識などの故に、フネは尊敬の念を勝ち得ていることも事実である。フネのこの点に関する見解は、職業上の知識に通じているのでジェリより上だというもので、「ジェリは白米でわれらは上にかけるソースだ」に代表される。事実フネの伝承はイスラムの学識に影響されており、モディボの登場人物たちも宗教的抽象概念や道徳を口にする機会が多く、ならず者でさえ例外ではない。^{註27}フネの両義性はフネがイスラム教浸透とともに遅れて制度化されたグリオであるとすれば、無理からぬこととして容易に理解されよう。

グリオにとって重要なパトロンとの結びつきも、立場上の一般的相違を反映している。フネはコーラン学者と密接な関係を持ち、イスラム聖職者同行する。学者聖職者は多大の尊敬を

えているので、フネはそれを享受することができるからである。他方ジエリはイスラム教聖職者というよりは、各界の実力者をパトロンに選んでいることが多い。^(註30)

三 語り口の特徴 フネを中心に

1 呪術

バカリジヤンとビリシ対決（肉の横取り後）は主人公をめぐる挿話のクライマックスであるばかりでなく、モディボの語り口の特徴を示す恰好の材料を提供している。^(註31) 対決の構図は三者三様である。

（モディボ）セグ王国の非闇与を了解した旨を、バカリジヤンは王に表明したうえで、無頼漢と一騎打ち。

（シソコ）怪物ビリシと王国の非闇与宣言により孤立したバカリジヤンの鬭い。

（タイルー）マシナの戦士千人部隊を同道して乗り込んで来た無頼漢とフランの瘦せ男バカリジヤンの鬭い。王国は非闇与。

英雄を英雄たらしめる対決は構図にみるように、モディボにおいては対決そのものが冷静で抑制の利いた設定で開始するが、他の二人では、敵対者の拡大により武将が立たされた状況の悲壮性が強調されている。対決の展開をシソコと比べると一層はつきりする。

モディボ（888-973）挨拶後対決開始／すぐ追跡劇（セグ周囲2回とも、三回とも、六回とも七回とも伝えられる）／ビリシ、大水路に嵌る／勝者の会話、頭を切り落とす（あるいはバカリが鋭い斧を使つたといい、武器の種類には言及せず、武器を持たず立ち去ったという者もいる）／城門に着き、ビリシの頭を投げ入れた途端その手の側が半身不随となる／ジエリもフネも住民も大歓迎／息子とマラブは馬上の病人をおろし看病した。七日後回復

シソコ（P.27-40）挨拶後対決開始／バカリジヤン二度発砲するが殺傷できず／「殺人槍」を投げるも殺傷できず／ビリシの蜂の大群対バカリの蜥蜴の大群／ビリシの毒蛇の大群対バカリの鷺の群れ／ビリシが発砲／炎に包まれたバカリを護符から水が噴出して助ける／ビリシ、革袋から魔法使いの靈を引き出して脅迫／バカリジヤンの愛馬が後ろざり／追跡劇／三回駆け回ったあと、愛馬が退却を忠告／大水路に嵌るビリシ／ビリシの頭を討ち、その血でバカリは盲目に／（中略）城門は閉まり城外でさまようバカリ／（中略）息子が父を捜しに行く／王に面会したバカリはビリシの頭を投げ捨てる／王は褒美を与え、住民は大歓迎／王が魔術師に祈祷させ、七日後、目があく

決定的な相違は前者が挨拶、追跡劇のみであるのに対しても、後者は（タイルーも同様）魔術・呪術合戦が派手に展開されることである。冒険映画さらがらの鬭いや、その場にはいないうま

ラブが突如出現するなどはモディボにはない。呪術は削除され、魔術の巣窟と恐れられていたセグ王国の武将の鬪いを髣髴させる場面も存在しない。バカリジャンが障害を負う点では三者共通しているが、回復は、手でこする（タイルー）魔術師が七日七晩祈祷する（シソコ）に対して、モディボは息子とマラブが七日七晩看病するとある。突然半身不随を発症したことはありうることであり不自然でもあり、曖昧だが、看病による解決は実に現実的である。他方ジエリ二人は障害発症と回復を不思議あるいは魔術的世界のこととして一貫している。これらの解釈根拠として、モディボについては呪術を排斥するイスラム教の立場や、彼自身の表明「現実と合致しない系譜や、架空の絵空ごとを語らない」をあげることができようし、ジエリは王国のシンクレティズムを反映しており、ジエリに關する一般的評価、お伽噺化や誇張傾向のあらわれをいうことができるだろう。そしてさらにいえば、伝承が地域差、個人差以外に、語り手の立場による違いを含むこともありますのでないかと推測させてくれる。イスラム教との深い関係を持つ立場とその伝承におけるフネの特徴は何よりも先ず、イスラム関連のテーマ選択だが、非イスラム系伝承においては、魔術や呪術など伝統的宗教要素の有無を、伝承分析の重要な要素として注目する必要があろう。

2 イスラム教導師マラブと占い
マラブはビリシ対決の勝敗を分ける重要な存在である。マラ

ブの占いの確さと護符の威力がない限り、武将の腕力だけで勝てる戦いではなく、絶対必要条件といつても過言ではない。当然ビリシにもマラブは付いているが、三編のどの物語にも登場しない。マラブに関してジエリ二者とモディボが異なるのは、モディボのみが語るバカリジャンの誕生挿話に關係する（あらすじ参照）。誕生、不遇な幼少期、王国を救う武将の王国到來予言と、バカリジャンの英雄性はビリシと対決する以前すでにマラブの予言でお膳立てされ、保障されている。予言は次々に実現し、確かに全編を貫いて安定している。対決にあたり、モディボのバカリジャンは物語中唯一人のマラブに依頼する。（シソコは三人、タイルーでは二人のマラブ）これは地方の貧しい牛飼いシニカジヤンと孤立したバカリジャンが頼むマラブと、王が直接依頼するマラブは同一人物であることを意味し、客観的にはありえない。傑出した英雄を保障する人物としてのマラブの權威の一本化と強調、物語の簡素化と解釈するほうが適切だろう。それを裏付けるように、主人公は戦いの吉兆占いを一回依頼しているのみである。シソコの場合は、一人目のマラブは呪術でビリシとコンタクトしたあと、護符と必勝の秘策を与える、最後に逃げの一手も教示する。二人目は、二頭の山羊で占う指示し、結果報告をすると「逃げないと負ける」と忠告する。三人目は護符を一枚授け、一枚を溝に投げ込むことと逃げの一手を助言する。三人のマラブは逃げの一手で一致するが、二人目は占いの不確定性を示す発言（はつきり言えないのでや

ギ占いの結果を見てから)をするなど、念をいれて三人に聞く主人公の占いに対する慎重な態度と同調している。文学的関心からいえば、絶対的に信頼できない占いに勝敗をゆだねる不安感が、お伽噺的誇張とは逆の現実的スリル感を与え、マラブ不信というより、マラブの占いを必要不可欠としながら、不確かなら占いに依存する英雄の運命を観客が共有するための前提を成していると云えよう。しかし宗教的観点からいえば、語り手のイスラム教とその占いに対するスタンスの反映とどるほうが現実的といえるだろう。他方タイルーの場合、二人のマラブは対句的に同じ文句の繰り返しで表され、聞くものの格別な注意を引くことなく、語り手の格別な意図を示すことなく、他の語り上の決まりに従い織り込められている。

フネにとってマラブの存在は王侯貴族に匹敵するほど重要で、両者は密接な相互依存関係を持つことは先述した通りだが、モディイボの叙述の中でもその重要性は確固として揺るがない。けれどもそれはジエリにとつても同様であり、その語りにおいてもまた重要な存在であることに変わりはない。それはマラブという存在そのものが王国で占める位置そのものであり、伝承における多少の相違は各伝承者のマラブ観の反映という方が妥当であろう。

視覚的描写が極度に少ないことはモディイボの大きな特徴であ

り、人物描写においてもっとも顕著である。とりわけビリシの設定は叙述の基本的性格を決定するほど重要である。三者を並べてみると、

モディイボ(515-522)頭がひとつで十二目の怪物に変身すると誰もがいつた／ビリシがそこについて 悪魔たちもそこにいた／鬼でもあつた彼は変身する／ビリシは頭でつかちだからすぐわかる／大きすぎる頭が特徴だ／あいつは人間ではないともっぱらの幢だった／母親がビリシを産み落としたとき／彼はもう子供だったという、まことしやかな伝説もある

シソコ(p.7)七つの頭を持つ怪物(p.25)七つ目、七つ口、七つの頭、人間ではない 何かの靈だ(p.16)五頭の馬を引き連れ、腰に剣をさげ、立派な衣装を着ている

タイルー(6118-6124)ビリシは身体的に奇態だった。膝まで白く、手から肘まで白かった。顔面も白く、大きな頭部には3つの瘤があり、三角形にみえた。恐ろしい姿だった。(7220)ビリシはフラン戦士千人部隊を率いマシナに去った(7225)ビリシの頭には角張ったこぶが三つあった

モディイボはビリシの並はずれた異常性を否定しているわけではないが、鬼、悪魔、変身する、子供として誕生した等、具体性を避け抽象的描写で統一したうえで、その根拠をうわざに置くことでさらには彼の非現実性を除去する。(他のフネもモディイボ同様現実離れした人物設定を避けるかについては、今後もフネの語りを検討するさいの留意点であろう) 抽象的といえば、

モディボは一步引いて外形的描写に時間をさくことはないかわりに、会話と行動描写で叙述を進めていくが、彼のことばは実質的やり取りの他に宗教的、あるいは抽象的内容に向かう傾向がある。たとえば、水路に嵌つたビリシの首をはねる寸前にも、二人は兄よ弟よと呼び交わし、勝敗を神の意思の反映だとする礼にかなう会話をしている。ジェリにはない特徴である。ところがシソコは対決場面でも（怪物ビリシ、城壁によじ登り面白半分に見物する野次馬）王宮描写でも（インテリヤ、宫廷人、動物、王の謁見ぶり、グリオ団の様子等々）視覚的ディテールを盛り込み、それらを肯定的に語り、御伽噺的要素や、物語り性を確かなものにしている。隋所でシソコが配慮するのは、現実でありながらディテールで現実を脱し、逆に非現実的で、ながらディテールで現実的に語る、飛翔しそぎずに飛翔する視覚的おもしろさである。タイルーはといえば、フラン戦士という歴史的特定により、三人中誰よりも歴史的現実に接近し、ビルシ単独ならず者説を否定する立場を明確にしている。内容の正否はともかくとして、人間の身体的異常としての外形描写も詳しく述べ、モディボの描写以上に現実感がある。タイルーの叙事詩は口頭史の側面を十二分に發揮しているといえる。

4 英雄像
モディボは勝利後の顛末をこう叙述する。
(86) ビリシの首を切ったあと、バカリは穴から這い上がり、

馬に乗つた／彼は城門の方に向かつた（閉鎖したままの城内にビリシの頭部を放り投げた）(86)しかし、頭部を投げた腕全部があろうに麻痺してしまつたのだ

モディボのバカリジャンは他の登場人物同様、簡潔な行動事実に描写されるだけである。誇張されず、武勲でさえ過大な称揚をえることはない。王の無闇与通告を了解した上で城外に出で行く彼には、突然の障害にたいする嘆きの表現（ジェリと共に通する）は一切ない。対決後も速やかに城門に戻り、頭を投げ入れる。彼の英雄条件は誕生、不遇な幼児期・私生兒・村の不幸・王子によるいじめと王子殺し・対決・後日譚とジェリの叙事詩にない挿話を含めて十二分に強調されているが、一貫して状況と行動で示される。さらに戦士の潔さと勇気などの美德は以下に示す息子との会話のように、道徳的問答により確認され、闘将の側面が強調される。ジェリにこのような会話はない。(623-80)もし我が父バカリをビリシが打ち倒したら潔き御

最期を／万が一恐怖を覚えセグ目掛けて遁走などしたら／我らは城門を固く締めます／また万が一ビリシに卑怯にも後ろを見せることあらば／私は父上を殺し私も死に果てます／挑んだ戦いから逃げるは言語道断です／息子よおまえの言いい条了解した

モディボの物語展開は迅速で、ディテールの面白さを欠く反面、荒削りで直線裁ちの線の太さと力強さを生み、スピード感に小気味良く照應し合い、バカリジャンの勇猛果敢と潔さを創

出する。全編を通じ場面ごとに視覚的立體的配慮を怠らず、文学的にはより洗練され、聴衆を飽きさせない意図を感じさせるが、モディ・ボはむしろ声によることはの特質を最大に活かし、その迫力で全編を押し切っている観がある。そして彼はことあるごとに語り手として介入し「諸説がある」を繰り返し、伝説内容の信憑性について認識自覺していることを強調する。この認識表明はシソコ、タイルーにはない。

他方シソコは嘆きの英雄を描写する。

(p.37)父が座り込んでいるのが見えた／道の真中に　両の手に愛馬ノンテの手綱／そしてビリシの頭　バカリジヤンは繰り返し嘆いていた／「俺はビリシに勝った　しかるにどうだ　この様は／死んでしまつたほうが　良かつたのだ」

背後で閉まる城門、怪物との魔術合戦、勇壮な騎馬戦、追跡劇そして勝利、と劇的効果が高まつたところで盲目となる孤独なヒーローは見放され咽びながら荒野をさまよう。この場面は絶望の吐露と人間的弱さを垣間見せる英雄を描き出し、古代悲劇を想起させる文学的効果を上げ、英雄像を貶めるよりむしろ記憶に残り易い英雄像を結んでいるといえる。ちなみにタイルーの場合、「ビリシ兄よ、お前に勝つたが私は盲人だ(7600)」とつぶやく、最小限の事実認識表現のあと愛馬に助けられてビルシの頭を拾う。するとあつさり眼があき、悲劇要素は即座に除去され、バカリジャンは弱さや悲劇性を獲得せず、その意味ではモディ・ボの英雄像に近い。彼の英雄は歴史のひとコマを彩

る一人の落ち着きある像として、叙事詩の網におさまっている。タイルーは人物に付く決り文句を多用し、讃美歌『樂器伴奏つき』も披露している。

最後に登場人物としてのグリオに関していえば、ジエリの叙事詩にはジエリが頻繁に登場するが、通常そこにフネの存在は特定されず、ジエリあるいはグリオと表されフネの存在を確認できない。モディ・ボの語りにおけるフネの登場は、筆者の知る限り非常に珍しい事例である。

(866-8687) グリオが急ぎ迎えに出てきて 四弦楽器ンゴニを奏でて褒め讃えた／口々に「バカリ お帰りなさい」と朗唱した／優雅なことばと物腰で グリオはいつた「よくぞよくぞ お帰りなさいました」／優雅なことばと物腰で フネもいつた「よくぞよくぞ お帰りなさいました」

従来フネはジエリに隠れてあまり注目されず、まだ多くのことが未知のままである。その起源はイスラム教浸透とともに、イスラム教関連の宗教詩朗詠などを職掌とする語り部として、ジエリにずっと遅れて15—6世紀頃誕生したと推測されている。フネ、モディ・ボ・カマラによる「バカリジャン」〔セグ叙事詩〕は、シンクレティズムの不在、誇張された物語性の排除などがジエリの語りに比べて大きな特徴といえるが、一事例で得られた特徴が語り口におけるフネらしさやジエリらしさ、地域性、あるいはグリオの特質などを考へるさいに、どこまで

有効かは今後の研究に譲らるべし。

主眼参考文献

- Ba, Amadou Hampaté, et Dagnet, Jacques, *L'empire peul du Macina*(Paris, La Haye, Mouton, 1962); réédition(Abidjan, Paris, Les Nouvelles Editions africaines, Editions de l'EHESS, 1984).
- Bazin, Jean, *Guerre et servitude à Ségou, L'esclavage en Afrique précoloniale*, (Paris, François Maspero, 1975).
- Bazin, Jean, *La production du récit historique*, CEA, 73-76, XIX, 1-4, 1979.
- Bime, André, *Ségou, ville capitale*, préface d'Emile Belime (Angoulême, Imprimerie H. Corrigan et J. Lachanaud, 1952).
- Delafosse, Maurice, *Haut-Sénégal-Niger. Tome I, II, III*, nouvelle impression avec nouvelle préface de Robert Cornevin (Paris, G.P. Maisonneuve et Larose, 1972).
- Dieterlen, Germaine, *Essai sur la religion bambara*, préface de Marcel Griaule; rééd.(Bruxelles, Editions de l'université de Bruxelles, 1988).
- Dieterlen, Germaine, et Cissé, Youssouf, *Les fondements de la société d'initiation du Komo*(Paris, La Haye, Mouton, 1972) « Cahiers de l'Homme, n.s., 10 ».
- Hale, Thomas, A., Scribe, Griot and Novelist: *Narrative Interpreters of the Songhay Empire..Followed by the Epic of Askia Mohamed*
- 1 1995/8 於バーリ。トキベトムトヨリ未整備なのじ、本稿中の
二用さゞハバト語に起りした原稿の行数を示す。
- 2 Conrad, D.C., *State of Intrigue, The epic of Bamana Segu*, According to Tairu Banbera, The Oxford University Press, 1990. 語の手は現代バハバグリオの最高峰と語彙やねじ
こだが、厳格なマスクマセクトに属し棄業して物故。
- 3 Lilyan Kesteloot ; *L'Epopee Bambara de Ségou*, tome I, L'Harmattan, 1993. 仮訳で原語トキベトマナ。行数がなく、
指訳の二用部分はページ番号で示す。
- 4 1790 - 92にザリトナハロロ対マロロ（異母兄弟）の権力抗
争があり、翌年即位したマロロ・サハマ（1792 - 1808）
セマハリ・パーク入国拒否で知られる。

Recounted by Noubou Malio(Gainesville, University of Florida Press, 1990).

Kesteloot, Lilyan, *Le mythe et l'histoire dans la formation de l'empire de Ségou*, BIFSN, XL, 3(jul. 1978)pp.578-611.

N'Diaye, Bokar, *Les castes au Mali*(Bamako, Editions populaires, 1970), « Hier ».

Simaga, Mamadou Karamoko, *Ségu, Sikoro Balanzan*, (Bamako, éd. Imprimeries du Mali, 1988).

Tauxier, Louis, *Histoire des Bambara*(Paris, Paul Geuthner, 1942).

- 5 Mungo Park ; *Voyage en Afrique*, 1795 - 1796, Paris, François Maspero,1980.
- 6 René Caillé ; *Journal d'un voyage à Tombouctou et à Djenné dans l'Afrique centrale*, Maisonneuve et Larose, 1966.
- 7 中村雄祐「西スーザンにおける内婚世襲制度の語り部・楽師の制度、シエリヤの歴史的変遷」東京大学大学院総合文化研究科 博士論文 119頁
- 8 中村雄祐 既出 121頁
- 9 同右 128頁
- 10 Kestloot,Lilyan,1993,pp.11-12.
- 11 セグ帝国軍事力に亘る具体的記録もあるが、「バカリジヤン」のダ王は、強大な軍を動かしうる王としては描かれていな。むしろ、無頼漢ひとり（あるいは集團）の面となりて、住民の恐怖や困惑は見過され、そのまま逃げ腰の王であり、バカリジャンが王を馬鹿にしたと耳じかけられ、ただちに陰謀を企ておひよ寄せ、亡き者にしよへしやる。王権保身にたけた君主として描かれてる。
- 12 Conrad,D.C.,1990,p.269.
- 13 セグ地域では、ジョカラメはバチリ（Bacili または Bathily）クランである。フラーの間ではマント系のニヤマカロにあたる職能を持つことが多い。（地域により異なることが多いが）現在、彼らはバマコや裕福な商人として活躍している。
- 14 マンデ語圏の民話のなかの特異なトリックスター。森やブンヌに住み、悪事を好む」とが共通するが、多様な姿からたらで語られてる。
- 15 Dumestre,la geste de Ségou,raconté par des griots bambara, Paris,Armand Colin,1979, pp.115-17.
- 16 ハネの呼称はアハア語のfaani 青術家、テクリンヤハ、に由来し、フィナ、フィネが一番多い変形ヴァリト、ハーレーと知られる Tamari,Tal, *Les castes de l'Afrique occidentale, artisans et musiciens endogamés*, Société d'Ethnologie,1997,p94.
- 17 もともとフネは、イスラム宗教詩の詠唱、朗誦を専門とする人だったようだが、筆者の調査では主にイスラム系伝承の語り部、宗教儀式を司る（ルンバのみ）、系譜語り、樂踊ではない、などのが主だった。
- 18 Tamali,Tal,1997,pp.79-86.
- 19 Park,Mungo,1980,p.277.
- 20 Tamai,Tal,1997,pp.92-94.
- 21 ムハンマドがメジナに着いてアンサリ宅に宿泊した。アンサリは歓待したのやウォサナの娘をもひいた。
- 22 Marloes Janson, *The link between two neglected groups of female bands, Jalinusolu and Finamusolu*,2002,p18. (□頭発表)
- 23 Tamali,Tal,1997,p44.
- 24 Monteil,Charles, *Les Bambara de Ségou et de Kaarta, (étude historique,ethnographique et littéraire d'une peuplade du*

Soudan français), préface de Vincent Montel, notes, ind exet

cartes de Jean Bazin(Paris,G.P.Maisonneuve

et Larose,1977).p.298,p317.

Marloes Janson,2002,p.16. (口頭発表) フオサナはスンジャ

ータのグリオ贊美もしたといふ説があり、パトロン関係を
結ぶべき事実と関連していふようくに推測されるが未確認。

Tautin,L.,Notes sur les castes chez les Mandingues et en
particulier chez les Banmanas, *Revue d'ethnographie*, III,
1884,pp.343-353. Labouret,Henri, *Les Mandingues et langue*.

Paris,Librairies Larose,1934,p.107税金の取立て、警護要員、
使ふ走り、カヌー作り、カラバス修理、情報収集、等。
Tamali,Tal,1997,p166.

Marloes Janson,2002,p16.

本稿十一頁参照

たとえばガンビアやザマラブがフネのペーロハジなるりん
が多ふじふべ。「フネはマラブの宣伝をしてくれぬ」、フ
ネがコーランを詠唱すると勇気がわく」 Marloes,
Janson,2002,p18. (口頭発表)

たとえば、ジエリムムソが経済界の大物を後ろ盾にスター
振りを發揮している事例は枚挙にいとまがないほどある。

しかしながら、フネが制度的に出現して久しいセゲの時代
ではあっても、セゲ王国におけるフネの情勢は不明で、モ
ディボの伝承ソースも明らかにされないので、結果はフネ、

34 33

Modibo,Kamara,(931-944)

ジェリのあぬヴァーハニアでは「セリンは怪物だが」とモ
ディボに問い合わせたところ、「セリンは実在人物だ。ジエ
リはいつもそういう誇張をする傾向があるが、フネは現実
にその子孫が今どうしているかについても語ることができ
る」と語った。しかしスタイルに明らかなるように、モデ
ィボの批判は必ずしも非だらしないだね。1995.8於バマコ。

(ふづみ・しげり／大東文化大学)

モディボの語り口にして理解してね。